



おしおのベリな
 JOMON文
 ギャラリー
 夢ロード

縄文の一万年間は、原初の日本語の開発の時代であり、
 れと並行して、自然界との関係のし方の理解を深め
 ながら数々の日常のしぐさ、工夫物が生み出された時代
 であつたのだらうと想像します。

岡本太郎が再発見した時代からの後には、土器、土
 偶、石偶などを一度も目見られなかった方々が抱く縄文
 への夢、遠古の一万年間の奇事ある時代を思い出す夢が
 この日本にはあるようです。ここに展開する「おしおのベリな
 JOMON人」も、縄文ファンの一として、私版です。

この展覧会は、二度目の中間報告です。初展は昨年(二〇一七)十月
千葉県浦安の小さなギャラリー「どんぐりころころ」で、1324図
を展示しました。今回は1333図と、その周辺物を展示する
という、少々大がかりな中間報告になりまいた。それは、北高
藤タロード実行委員会、北白様ののご賛同のもと、波多野宏之氏
の綿密なる構想で実現されたもので、小生にとりまいては抱え切
れない重さの光栄であり、只今必死で持ちこたえているところでは

この「縄文幻夢譚」は、無計画にも「全50図」と決めて始のま
したがら、その数字を見ない限りいつでも中途半端な展示な
のです。どうぞお許し下さい。

旅人になつている縄文の親方とその弟子は今、新潟県長
岡あたりに居り、やがて、親方の兄の使いがてら「縄文のビー
ナス」^(左)生み出した天才おばさんを訪ね、その、長野の伊那地
方から東に回し、数々の名品を思いながら甲府あたりで菅田土
を胸に刻み、やがて佐久平をとぼとぼ歩き、追介けで突然噴
煙したのぼる浅間山に出会い、噴石降る中を林鹿のけもの道
を分け進み、菅十津の方に立ち戻らせるといふ、勝手な構想をたて
おります。縄文の人たちを苦しめたであろう数々の田舎者を
描ければ、たゞふり絵のモチーフにしたと思つて、もありません。

ヒ白さん。笑いなから、あるは嗤いなから見て下さい。

さき

私の展覧は、皆さんに叫んでいたたくのです。

目的の

5/15 2018 藤田 浩一 (満
八十歳八月)